

## 語源学と想像(1)

— 太古へ旅して —

坊 城 明 文\*

### Etymology and Imagination

— Traveling Back into Primeval Times —

Akifumi Bojyo

Etymology, which was once a small branch of linguistics, has now grown into a leafy tree of such trunk and height as we pause to look up and admire. This means that by using the new theories of other branches in linguistics, etymology itself has become a most sophisticated system beyond our reach. Against the recent tendency for this science to get more and more specialized, we can not put too much stress on the fact that it should be a field of study easily accessible to us all and that in searching the origins of words there always have to be such factors, on the part of students, as association, intuition, imagination and so on. Without being inspired by these imaginative visions, the elaborate system of etymology will turn out, sooner or later, to be a heap of knowledge of all too academic speciality.

So, etymology is by nature a science of language full of dreams and romance promising to present us with a view of the world of words far away and long ago. Put differently, etymology is, and should be, a delightful science, or rather a sort of journey through a maze of words far back into the past ages filled with unexpected findings.

The theme we have chosen here is the one regarding a strange etymological relationship between the verb 'hear' and the noun 'ear' which, as we think we have managed to follow it, has continued to exist for as long as six thousand years or more.

#### 1. 語源への旅立ち

かつて言語学 (Linguistics) の中の若木にすぎなかった語源学 (Etymology) は、今や見上げるまでの鬱蒼と生い茂った大木になっている。それは言語学の諸理論を援用した堅固な学問体系ができあがったということである。けれども、語源探求の根本には、言葉と言葉の関係に対する直観や閃きあるいは想像力が深く関わっていることは、昔も今も変わらないであろう。そしてそれなくしてはこの新しく成長した学問である語源学もまた、ますます精緻になっていく学問体系の

---

\* 教養部

中でいずれ窒息してしまう恐れなしとしないだろう。いずれの学問においても専門化や個別化は避けがたき宿命かもしれないが、そのあまりの細分化は学問の生命の確実な衰弱を引き起こさざるを得ない。わけでも言葉の由来を尋ねるこの学問はそうであってはならない。それは本来、自由な想像を源泉とする悦ばしき学問、ニーチェのいわゆる“Die Fröhliche Wissenschaft”たるべきものだからである。そしてその楽しさは、何よりもまず、疑問を追求すること自体の楽しさなのであり、労苦の果ての予期せぬ発見に対する新鮮な感動と無縁ではないであろう。

もちろん、語源の探求に際しいかに想像力が大切だとはいっても、想像と空想はちがうし、単なる空想から紡ぎ出された言葉の解釈は悪くすると 一種の pun (語呂合わせ)に墮してしまう。たとえば漢字の「言」や「語」の字の中に「口」が含まれていたり、「話」という字に「舌」があるのは、漢字成立の特質からして十分に納得のいくことであるが、だからといって、たとえば日本語の「申す」という言葉を、[もうす<sup>ウ</sup>まをす<sup>ウ</sup>まうす]、だからここにも口があると言ったら、それは悪しき pun である。しかし、次の場合ならどうだろうか。たとえばこの国を <ニホン> あるいは <ニッポン> と発音するようになったのはなぜか、また「東」という字をなぜ今日“ひがし”と発音するのかと専門の国語学者に尋ねれば、後者の問いに対しては、ただちにこんな答が返ってくるにちがいない。[太陽の昇る方に向かうこと<sup>ウ</sup>日向かふ<sup>ウ</sup>ひむがし<sup>ウ</sup>ひんがし<sup>ウ</sup>ひがし] になったと。これに対して、もし昇る太陽に向かうことから“ひがし”になったのが正しいとすれば、それでは、西を“にし”と発音するのは、これと同様に、[陽の傾き沈む方向<sup>ウ</sup>日落つ<sup>ウ</sup>日死す<sup>ウ</sup>日死<sup>ウ</sup>日=に+死=し] だから“にし”になったのではないかとする想像的解釈は、はたして語源学的検証に耐え得ぬ単なる臆見にすぎないだろうか。

このように、語源探索における想像と空想の働きを截然と区別するのは、難しいことである。どちらも英語では imagination であって、心に image を結ぶことでは同じことだからである。むしろこうした一見恣意的としか思えない言葉のイメージの中からこそ、あるいは思わぬ語源への道が開けてくるかもしれない。二三の例をあげてみよう。

たとえば漢字で耳に心と書いた「恥」という字には、内心の羞恥が耳に現れるといった意味合いが込められていると聞くと、英語ではどうだろうか。実は英語の heart (心)の中にも ear (耳)の字が含まれている。してみると、英語でも心と耳はやはり何か関係があるのではないかと、このように学生から質問されたとしてみよう。われわれは当然これを愚問として一笑に付すであろう。あたかも英語の WALK (歩く)の中が A・L・K (あ・る・く)と読めるから日本語の歩くと関係があるのではないかと考えるのと同じような荒唐無稽なことだと論じて。

ところが、例の学生がまたやって来て、漢字の「聞」や「聴」に「耳」の字が入っているのは、漢字の成り立ちからしてよくわかるが、英語の hear (聞く)や hearken (聴く)の綴りをよく見るとその中にも、なんと ear (耳)の字が入っている。これも単なる偶然の一致と見るべきであろうか、それとも何か深い意味があるのだろうか、さも感激した面持ちで質問してきたとしたら、どうだろうか。言葉への放恣な夢想に耽っているこの学生のこのような質問に直面して、われわれ語学の研究者は、いったい何と答えたらよいだろうか。

「何? ヒヤの中にミミがある? まだそんなとぼけたことにうつつを抜かしてるのかッ」と一喝し

て追い返すだろうか。あるいは、その質問のあまりの幼稚さにあきれて、

「イヤハヤ... ヒヤ(hear)とハーケン(hearken)がなぜ同じ語源かと中学生でも尋ねるならまだしも、いい齢をした大学生にもなって、なぜヒヤにイヤが付いてるかなどと、何をいつまでつまらぬ寝言などにかかずらっているのかね」と、権もほろろにはねつけるだろうか。

それともわれわれは、しばし沈思黙考したあと、おもむろに口を開いて、

「ウム... そういえば、サイト(視覚)の中にもアイ(目)の音が入っているが...。してみると、たしかに動詞の中に名詞が同居している、このヒヤとイヤの奇妙な言葉の内的構造というものには、君が指摘するように、なにか深い言語的意味が潜んでいる可能性がないとは、あながち断言できないような気もするが...。思うに、これもやはり、悠久なる歴史と伝統とに根ざした民族や人類社会の言語形成という観点から歴史一言語学的に考察を加えてみなければなかなか見えてこないような、意外と奥行き深い問題ではないのかな」などと答えるだろうか。われわれは、おそらく後者の方であろう。そして、この孤独な学生の夢に学問の翼を与えるべく、かれに向かって、

「さあ、今から一緒に研究室へ行かないか、そしてひとつ徹底的に調べてみないか」と誘わないだろうか。語源への遠い二人旅へと。

\* \* \*

## 2. HEAR(聞く)と EAR(耳)との語源学的関係について

英語の動詞 hear に聴覚器官を表す名詞 ear が含まれているのは、綴りや音声上の単なる偶然の一致にすぎないのだろうか。

まず、英語とドイツ語の語源辞典の中から、動詞「聞く」と名詞「耳」の項目を抜き出してみよう。

1A. hear v. ME here(n) < OE (Anglian) heran (= WS hieran < Gmc xauzjan (Du. horen/G hören/ ON heyra/ Goth. hausyan) < IE(ǵ)keu- to pay attention, watch, observe, see, hear (GK akouein to hear (⇨ acoustic)/Skt kaví- wise, seer): cf. show.

1B. ear n. OE eare < Gmc auzon, auson (Du. oor/G Ohr/ON eyra/Goth. auso) < IE ous-, aus- (L auris/ Gk oûs/ Ir. ó/ Russ. ukho/ Lith. / aussis).

\* \* \*

2A. hören Ztw. Ahn. horan, horren, asächs. horian, afries. hera, hora, ags. hyran, engl. hear, anord. heyra, got. hausyan führen auf germ. hauzyan zu Wz. hauz, vorgerm. kous, wozu auch gr. akoúo für akoúio. Wahrscheinlich mit oûs 'Ohr' verwandt (s. Ohr). Den Anlaut gr. ak-, germ. h- führt Kretschmer auf das idg. Adj. ak- 'scharf' (in gr. ákros, lat. acer) zurück, s. Ecke. Idg. akous- wäre dann 'ein scharfes Ohr auf etw. habend'. Dazu (ge)horchen, Gehorsam.

2B. Ohr n. Mhd. ore, ahd. asächs. anl. ora, afries. are, ags. eare, engl. ear, anord. eyra führt auf germ. auszan-. Dazu in gramm. Wechsel (germ. ausan-) got. auso. air. au, o (aus ausos), lat. auris für ausis, gr. -oûs (aus oûsos).

これがいわば、旅に先立ってわれわれに与えられた語源地図である。この地図から何を読み取ることができるだろうか。まず(1A)と(2A)を対比させながら現代語の部分を取り出してみよう。

[E hear-ear G hören-Ohr DU. horen-oor]

一見して分かることは、英語ほど鮮やかな形ではないが、英語と同族言語であるドイツ語でも動詞 hören (聞く)の中に名詞 Ohr (耳)が入っており、またドイツ語と兄弟語のオランダ語でも「聞く」horen に、耳の oor が含まれていることである。同族語とはいえ、なぜ現代の英独蘭三か国語の動詞「聞く」の中に同じ「耳」という名詞が入っているのだろうか。

以上のことがらを確認した上で、それでは昔はどうだったのか、さらに時代を遡って見てみよう。実は、ある不思議な事実が浮かび上がってくるのである。

#### A) 現代から中世・古代へ (hの謎)

昔といっても今から900年～500年前のいわゆる中世英語(ME/ A. D. 1150～1500)では、聞くという動詞(の不定詞) heren に対し、名詞の耳は ere である。また、ME とほぼ同時代にあたる中世ドイツ語(MD/ A. D. 1050～1500)では、聞くは heren 耳は ore であり、中世オランダ語(MDu)では、聞く hōren 耳 ore である。見られるように、ここでも動詞の中に名詞が組み込まれていて、実に中世初期から現代に到るほぼ900年もの間、やはり英独蘭の世界では、動詞「聞く」の中に名詞「耳」がさながらヤドカリのように住みついているのである。この言語的事実を、われわれはどのように解釈したらよいのであろうか。それでは、中世からさらに数百年を溯ったいわゆるアングロ・サクソンの古代英語(OE/ A. D. 450～1150)ではどうだろうか。

[1A; OE(Anglian) heran (=WS hieran)-eare]

「聞く」と「耳」は、初期 OE の中核をなすウエストサクソン語(WS)では hieran と eare である。(ちなみに、この弱変化動詞 hieran は hier-を語根として直説法と接続法のそれぞれの現在形と過去形に単数と複数の人称変化があり、命令法も含めると14種類以上の語尾変化をみせている。またアングル語、つまり古代英国の東部と北部の方言では、heran である。)このヒーエランとエーアレとの関係が今日のヒヤとイヤに繋がっていることは、容易に推測がつくであろう。では、これよりもさらに古い起源をもつといわれるあのヴァイキングの古北欧語(ON)ではどうか。意外というべきか、はたまた当然というべきか、動詞 heyra 対して名詞 eyra なのである。ここでもはっきりと、あの hear と ear の内包関係、すなわち(動詞「聞く」=H+名詞「耳」)の構造が成り立っているのである。このことは、いったい何を物語っていると考えるべきであろうか。そもそも動詞の語頭文字 h は、何を意味しているのか。

けれども、われわれが英語として辿り得るのは最大限、ここまでである。というのは、周知のようにアングロ・サクソン人のブリテン島侵攻の年(紀元449年)をもって英国における古代英語誕生の初年とすれば、英語としてそれ以前に遡ることはできないからである。...そして今、日本では古墳時代にもあたろうかというこの5世紀半ばのサクソン族の二つの古語が、われわれをそのルーツ探しへと誘うかのように、われわれの耳の中でしきりに鳴り響いているのである。

それでは、このはるか千五百年前の、時には掛け声のように時には笛の音のように<ヒーエラン・エーアレ>と呼応し合う古代の言の葉のあえかな響きに誘われて、さて、われわれは次に、どこへ旅すればよいのだろうか。いうまでもなくそれは、アングロ・サクソン人の共通のふるさと、かの古きゲルマンの大地でなければならない。

われわれも太古のゲルマニアの森に入っていく、古いドイツ語の、あるいは古ザクセン語の神さびた響きに耳を澄ましてみよう。するとそれは、ホーランとも、ホールレンとも聞こえてくるのである。「聞く」がホーランあるいはホールレンなら、聞く「耳」は何だろうか。それは、われわれの推定したあの構造式に従えば、動詞<ホーラン>から語頭の h と不定詞語尾の n を取り去った音、<オーラ>の響きをもつ言葉でなければならない。本当にそうなのか。

資料 2A と 2B の最初の表示を見てみよう。

[2A; hören Ztw. Ahd. horan, horren asächs. horian] [2B; Ohr n. ahd. asächs. ora]

オーラ、やはり、推測は当たっていたのである。

このように中世ドイツ語の haren/ ore からさらに遡ること500年、古代ドイツ語(AHD/A. D. 500~1050)の昔に到っても、なお頑固に horan(horren)/ ora の言語構造と音質を保持しているというのは実に驚嘆すべきことではあるまいか。いや、この古代の言葉の響きは現代のドイツ語の hören/ Ohr の中に脈々と息づいているのである。少なくともここには、一千数百年の時の流れを棒の如く貫いてなお不易なるものがある。言い換えれば、そこには、同じく千数百年の昔、野にかぎろいの立つ東をばくひんがしと呼びならわしていた古の世の日本人の言葉が今なおこの国の現在にまで流れ伝わっていることと同質の、言語の不朽性を象徴するある共通するものが見られるのである。民族の悠久なる歴史と伝統とに根ざしたものは、まさにかかるものでなければならない。

さて、感慨はしばらく傍らに置き、資料に現れた語源の流れをさらに追跡する作業に入ろう。まず、資料の(B-1)と(B-2)から次のような表を作ってみる。

1. 西ゲルマン語派	I. アングル語	heran	eare
	II. サクソン語	hieran(hyran)	eare
	III. 古フリースラ語	hera(hora)	are
	IV. 古ザクセン語	horian	ora
	V. 古高地ドイツ語	horan(horren)	ora
2. 北ゲルマン語派	古北欧語	heyra	eyra
3. 東ゲルマン語派	ゴート語	hausyan	auso
4. イタリアック語派	古典ラテン語	audire	auris

この表を睨んでいて、いくつかの疑問が浮かんで来ないだろうか。まず目を引くのは、他のゲルマン語派と較べて東ゲルマン語派のゴート語が見せているラテン語との際立った類似性である。これは、なぜであろうか。ゲルマンの諸部族の中でもゴート族がより頻繁に経験したであろうローマ人との言語接触のせいであろうか。

(ゴート族がにわかに世界史の舞台に姿を見せるのは、日本では邪馬台国の卑弥呼の時代、つまり3世紀の半ば頃からであり、ことに紀元375年ローマ領内における彼らの暴動に端を発した、いわゆるゲルマン民族の大移動とその後の西ゴート王国の建設と繁栄ぶりをみれば、いかに彼らが強大な勢力を誇った部族であったかが分かる。またゴート語による新約聖書の翻訳も、民族大移動の始まる30年以上前には完成していた。)

そこで当然考えられるのは、ゴート族とローマ帝国との歴史的な関わりからゴート語の *hausyan-auso* がラテン語の *audire-auris* に由来するのではないか、という推測である。そしてこの西洋古代の言語の王者たる古典ラテン語においても、たしかに動詞 *audire* (聞く)の中には名詞 *auris* (耳)が含まれているように見えるのである。*audire* の一人称単数現在形は *audio* である。ラテン語辞典にはだから、*audire* について [aus=auris+do] と付記してある。「聞く」とは、「耳を与える」こと、つまり耳を傾けることだというのである。ここから実に容易に、*hear* の最終語源をラテン語の *audire* とする解釈が生まれてくる。

しかし本当にそうだろうか。*hear* における *ear* の内属関係を追ってはるばる1800年前のゴート語までやってきたわれわれには、どこか素直には認めがたい思いがしないだろうか。なぜか。それを次に論証してみよう。

ラテン語の *audire* を見てまず思うのは、ゴート語まであった語頭の *h* が忽然と姿を消していることである。もし *audire* がゴート語の *hausyan* の語源であるならば、われわれの推測した定式(動詞「聞く」=h+名詞「耳」)において、名詞「耳」を統べて動詞化している語頭子音の *h* が無いということは、われわれの推理の破綻を意味するだろう。せめて(h+auris)から生まれた動詞 *haurio* といった言葉があってほしい。そしてたしかにその言葉はラテン語の中にあるのである。*haurire* (不定詞)の一人称単数現在 *haurio* である。しかし、その意味は「私は聞く」ではなくて、「私は飲む」あるいは酒などを「飲み干す」である。

ここで *audire* の語頭に *h* が無いことの二つの可能性が考えられる。後続の二重母音 [au] に文字通り飲み込まれたか、もともとなかったか、である。自ら消えたこともあり得るだろう。では、言語学でいうアフェレシス、すなわち語頭音消失が起こったとして、(h)*audire* からゴート語 *hausyan* が生じたと考えられるだろうか。否である。なぜなら、*audi-* を語根とするこの動詞の180様にもおよぶ屈折、語尾変化のどれからも、ゴート語の(haus-yan)へ、すなわち有声の閉鎖音 *d* から無声の摩擦音 *s* へ繋がる音韻推移の道が考えられないからである。また *audire* を(*auris+do*)と分けることは可能かもしれぬが、逆に *auris* (あるいは対格の *aurim*)+*do* (第一活用動詞)から *audire* (第四活用動詞)への生成の可能性などは考えられるだろうか。やはりこの動詞は *audi-* を語根とする一つの語と見るべきではないだろうか。すなわち、この動詞には名詞の耳は入っていないのではないか。だからこそ、われわれの資料(A-1)の注記でいみじくも次のように指摘されていたのである。[ラテン語 *audire* と *ear* との語源的関連(H. G. Wyld)は音韻上、認められない]と。そしてもし *auris* (耳)を含む「聞く」という意味のラテン語の動詞を求めるならば、それは *auscultare* であろう。後述するように、この語頭の *aus*こそゴート語の *ausos* と同様、耳を意味するのは明らかだからである。しかし、[名詞「耳」+動詞]の構造をも

つこの言葉は、われわれが追求してきた hear-hieran-horan-hausyan の語系列に繋がる言葉ではない。むしろそれは、現代英語の listen の語源と関係する言葉である。(なお、驚くべきことに、この古典ラテン語の audire は udire として、また auscultare は ascoltare として、二千数百年後の現代イタリア語の日常世界で立派に生きている。ここにも、悠久なる歴史に根ざした民族の不朽の言語的生命を見る思いがする。)

さて、ラテン語の audire が求める語源でないとすれば、われわれは ふとさ迷い込んだこのローマの世界—いつしか夕闇につつまれた古代ローマの街角を出て、次にどこへ旅の方位を定めたらよいのだろうか。それはやはり、オーラ(曙光)の立ち昇る夜明けの方角、あの東ゴート族の土地ではないだろうか。ゴート語へ戻ろう。

### B) 古代から紀元前30世紀へ (hの変容)

ところで、西、北、東の三つの語派に分かれたゲルマン語の多くの部族語には、それらが共に由来する一つの言語、すなわちゲルマン共通語あるいはゲルマン祖語の存在したことが知られている。紀元前1000年頃に主としてバルト海と北海の南岸あたりに限られていたゲルマン祖語は、紀元前後にはヨーロッパの広大な地域で用いられていたといわれている。それでは、今われわれがその語源を探しているゴート語の hausyan-auso がゲルマン祖語にその正統な起源をもつとすれば、では、動詞「聞く」にあたるそのゲルマン祖語とはどのような言葉でなければならないだろうか。その未知の言葉は、幾度も言うように、これまでのわれわれの推論に従えば、なによりも Verb=H+Noun“ear”の条件を備えた言葉でなければならないのである。はたしてそのような言葉がゲルマン祖語にあるかどうか。資料 1-A, 2-A で確認してみよう。

[ゴート語 hausyan-auso ; ゲルマン祖語 hauzyan-auson]

もはや明白であろう。今を去る実に3000年近い昔から、名詞「耳」は語頭子音[h]を介して動詞「聞く」の中にしっかりと組み込まれているのである。これが、われわれの到達した事実であり、これがまぎれもない言葉の歴史の事実である。こうして、現代英語の hear-ear から始まったわれわれの語源の旅も、遠く原始ゲルマン語の内にその最終起源を見いだしたことで、ようやく終わりに近づいたように思えるのである。

ところが さらに資料を睨んでいると、われわれはある奇妙なことに気づく。上述のゲルマン祖語に関して、資料 1A.1B と 2A.2B とでは、微妙に異なった二様の語源が載っている。

[1B; Gmc auzon, auson] [2B; germ auzan, ausan]

この差異はしかし、さほど問題にするまでもないだろう。au-zan と au-zon に見られる母音 a から o への、あるいは au-son と au-zon における無声子音[s]から有声子音[z]への推移の理由は容易に推測がつくからである。しかし見逃せないのは、動詞「聞く」のゲルマン祖語に関して二つの語源辞典に記載されている、微妙な、しかし歴然とした相違である。

[1A; Gmc xauzjan] [2B; got. hausyan führen auf germ. hauzyan zu Wz. hauz]

見られるように、クルーゲ(のドイツ語源辞典)が掲げている、hauz を語根とするゲルマン祖語 hauzyan に対し、英語語源辞書ではこれが xauzjan となっている。問題は、この <xauzjan> と

いう語にある。

ゲルマン祖語に突如現れた見慣れぬ言葉 *xauzjan*、ことに語頭文字の *x* が意味するものは何なのか。そもそも *[xau]* は何と発音したらよいのか。もしゲルマン祖語のそのまた祖語が存在するとすれば、この奇妙な言葉 *xauzjan* はどんな言語のどの言葉に由来するのか。語頭子音 *[h]* から *[x]* への思いがけない転換に直面して、われわれの想像に火がつかないだろうか。以下、燃えあがる疑問から想像・閃きを経て解決へと思い到るまでのひとつのプロセスを書きつらねてみよう。【語頭文字 *x* とは何か。現代ドイツ語の *ch* の発音記号 *[x]* のことであろうか。... *Nacht*(夜)、*Tochter*(娘)、*achten*(注意する)、*Bach*(小川)と意思のままあげてみても、どの *[x]* の発音も語中あるいは語尾の *ch* の発音でしかない。語頭から *[x]* の音声をもつドイツ語の言葉などあったらだろうか。語頭の *ch* には *[ç]* か *[k]* の音しかあるまい。*[k]* といえば、*ch* はラテン語では、常に *[kh]* の発音である。*charta*(カルタ)、*charitas*(カリタス、慈愛)がそれだ。いや、それよりも、*x* とはあの *X'mas* (クリスマス)の *x* ではないのか。あるいはキリスト (*χριστός*)の *x*。すなわちギリシャ文字のキー (*χι*) ではあるまいか。*x* の音価はこれも *[kh]* である。とすれば、*[xau]* の発音は *[khau]* に相違ないだろう。では、*[kh]* はどんな音声だろうか。*[k]* は喉頭を蹴るようにして出す無声の破裂音であり、*[h]* は息を喉頭から吐き出す帯気音である。この二つの音を一度に発声してみよう。すると *[kh]* は、激しく痰を吐き切るときの「カハッ」という摩擦音にちかく聞こえるだろう。してみれば、ゲルマン祖語 *xauzjan* はその音声に従って *khauzjan* と表記してもよいのではないか。しかしそれにしても、この喉頭帯気音 *[kh]* を語頭にもつ *xauzjan* と単なる気音 *[h]* の *hausjan* との違いは何を意味するのだろうか。

ここに一つの推測が成り立つ。それは、ゲルマン祖語における語頭子音 *[h]* は *[kh]* の強い発声から次第に弱音化して単なる気音になったのではないか、逆にいえば、時代を遡るにつれて語頭子音はいつそう強音化の傾向にあったと考えられないか、という推測である。もしこの推測が正しければ、頭音の最も弱い *hausjan* 以前に、強度が中程度の *xausjan* があり、これよりもさらに溯って頭音の最も強いある言葉があったと推定されないだろうか。その言葉は、帯気音すら伴わない純粋な喉頭破裂音 *[k]* を語頭にもつと考えられよう。つまり *k* → *kh* → *h* の順で語頭子音の弱音化が起こったとして、その最初に最強音の *k* を想定してみる。そして、原始ゲルマン語よりさらに以前に、*k* プラス「耳」の構造をもったある動詞が存在したのではないかと考えてみるのである。しかし、そのような動詞ははたして存在したのだろうか。資料に目を注いでみる。

[2A; ... got. *hausyan* führen auf germ. *hauzyan* zu wz. *hauz*, vorgerm. *kous*]

「前ゲルマン語 *kous*」—この言葉を目撃して、われわれはある感動を禁じ得ない。純粋な *[k]* 音を語頭にもち、しかも名詞「耳」*ous* を内包した、原始ゲルマン語以前の言葉がついにその姿を現したのである。今日の *hear-ear* の原形が、数千年を隔てた前ゲルマン語の *kous-ous* にあったということも、思えば、なにか不思議な気がしないだろうか。この二組の言葉を組み合わせて繰り返し何度も復唱してみよう。ヒヤ-ク-ス イヤウ-ス ク-スヒヤ- ウ-スク-ス ヒヤ-ク-スと。すると、まるで現代と太古の二つの言霊が交合したような奇妙な呪文にも似た響きが現出してくる。と、その時、われわれの脳裏に一瞬、啓示のように閃いたものがあった。「グリムの法則」



あるいは第一次子音推移、またの名をゲルマン語子音推移。すなわち k から h へのシフト。同時に、重く垂れこめていたわれわれの疑問は、雲間に陽がさすように氷解したのであった。】

(グリムの法則は周知のように、『グリム童話』で有名なドイツの言語学者 J. グリムが解明した言語学上の一大法則である。すなわちゲルマン語を他の語族から分離する根本的な変化の過程で生じた、子音体系の規則的変容についての法則である。そしてグリムの法則が語っている代表的な事例のひとつが、いまわれわれが問題にしているまさに k から h への転移に他ならなかった。ではこの第一次子音推移、すなわちゲルマン語成立の根本原因となった変音化現象が生じたのは、いつ頃のことであろうか。それは紀元前6世紀に先立つ数百年間のことであり、遅くとも前5世紀までには、この現象はほぼ完全に終息していたといわれている。)

このグリムの法則によって われわれは、ゲルマン祖語の xauzjan と hauzyan のごく大まかな成立年代が推定できるだろう。すなわち、もしわれわれの推測のように xauzjan の xau- が帯気破裂音(あるいは喉頭帯気音)の[kh]を伴っているとすれば、この言葉は第一次子音推移の波をうけて変容する以前の、あるいはその渦中の、少なくとも紀元前7~8世紀かそれ以前のものと考えねばならない。また、ゲルマン祖語 hauzyan は第一次推移現象の結果生まれた前6世紀以前の言葉と考えねばならない。そして、前ゲルマン語の kous にいたっては、ゲルマン語として分離する以前の、つまり他の語族と混淆融合していた頃の言葉と考えねばならないのである。

では、謂う所の他の語族とは、何という語族であろうか。すなわち、前ゲルマン語の kous は何語のどのような言葉から由来したのでであろうか。言い換えれば、もし前ゲルマン語の kous に限りなく近いある言葉、すなわち[k+名詞「耳」]の構造をもつ動詞があるとすれば、それこそがわれわれの捜し求めてきた hear-ear の最古の語源となるにちがいないが、それは、何という言語のどんな言葉なのか。

資料から該当する箇所を引き出して見よう。

[1A;hear ...<Gmc xauzjan←IE ous-,aus-(L auris/Gr oûs)]

[1B;hören...vorgerm.wozu auch gr.akoúo für akoúsio]

[2A;ear...<Gmc auzon,auson...←IE ous-,aus-(L auris/Gr oûs)]

[2B;Ohr... got.auso... lat.auris, gr.-oûs]

各資料が等しく指し示しているのは、西洋古代世界に燦然と輝くあの栄光の言語、古典ギリシャ語であったのだ。希語 ἀκούειν (アクーエイン)すなわち「聞く」であり、oûs (ウース)すなわち「耳」である。ここにもやはり動詞「聞く」の中に名詞「耳」が...いや、もはや繰り返すまでもあるまい。今を去る3000年以上の大昔から連綿と流れ来たったひとつの歴史-言語的事実を前にして、われわれはただ感嘆するだけである。

さて、われわれのこの語源の旅も、いよいよここで終わりだろうか。否、われわれは最後に遭遇したこの古代ギリシャ語 ἀκούειν の、双数も含め優に300を越える屈折変化の様態をつぶさに確認するいとまもなく、ただちに次の新たな旅立ちの準備にとりかからねばならない。なぜなら上記資料の標示にしたがえば、この古代ギリシャ語の時点よりさらに数千年溯ったところに、インド=ヨーロッパ語の広漠とした未開の言語空間が打ち開けてきたからである。そして古代ギリシ

ャ語 ἀκούειν と οὖς の一対の言葉もそこから由来したにちがいないのである。では、そのギリシャ語が淵源した究極の語源とは何か。われわれはさらに歩みを進めてみよう。

古代のギリシャ語が他のインド=ヨーロッパ語族から分かれ始めたのは、紀元前2000年の直後といわれている。ゲルマン祖語の原型が形作られ始めたのも、この時期を境にしてそれ以降のことである。紀元5世紀のあのゲルマン民族の大移動よりさらに遡って2500年、今からまさに4000年前のその時、古典ギリシャ語やゲルマン祖語の原型を成り立たせるに至った、いったいどんな出来事があったのだろうか。世界史は次の事実を簡潔に伝えている。

「B. C. 2000; インド=ヨーロッパ語族の諸民族、大移動を開始。ギリシャ人の第一波、北方からバルカン半島に南下し、ギリシャ本土に侵入、定着。」 —「世界史大年表」—

ここから先は、文献的裏付けのない、いわゆる想定語の世界である。しかし、われわれのごく僅かな資料からさえも、太古からの各語族語がこぞってその起源を指し示している一つの共通基語、すなわちインド=ヨーロッパ祖語(印欧祖語)の存在に行き着くことができるのである。

[1B; ear.. ←印欧語 ous-, aus-(ラテン語 auris/ギリシャ語 οὖς/イラン語 ó/ロシア語 ukho/リトアニア語 aussis)]

今や語源学は音韻論から形態論・統語論にわたる緻密な諸理論を駆使して、人類の究極の共通基語の一つである印欧祖語の实在を、疑い得ない歴史的事実として論証している。紀元前3000年頃、印欧語はまだ各語族に分化する以前の単一の言語であった。それでは、われわれが追い求めてきた hear-ear の最も原初の言語形態をもつこの印欧祖語 (Proto-Indo-European) において、名詞「耳」を内にもつ動詞「聞く」はどうなっているのだろうか。資料から分かるように、それはやはり語頭に ak をもち、[ak+ous(耳)] の例の構造を明確に示しているのである。では、この動詞「akous」の中に ous (耳)を永く封じ込めてきた接頭辞 ak のもつ意味とは、いったいどのようなものであったのだろうか。われわれはそこに秘められた謎を解き明かすべく、現代の言語学の成果に基づいて今を去る6000年以上昔の、すなわちヨーロッパがいまだ新石器時代にあった頃の、始源の言語の世界へと旅しなければならない。そのときわれわれは、言葉が言葉として生い立つ原初の世界の、ある不思議な光景を目のあたりにすることになる。 (つづく)

#### 資料文献

1. 『英語語源辞典』(寺澤芳雄編) 1997. 研究社 東京.
2. Etymologisches Wörterbuch der Deutschen Sprache(von Friedrich Kluge) 1967. Walter De Gruyter & CO. Berlin.
3. 『世界史大年表』1997. 山川出版 東京.
4. The Oxford English Dictionary-Second Edition. 1989. Oxford Univ. Press. London.
5. Kurze Geschichte der Deutschen Sprache(von Joachim Schmidt) 1991. Volk und Wissen Verlag GmbH, Berlin.
6. Die ersten Deutschen- Der Bericht über das rätselhafte Volk der Germanen. (von S. Fischer-Fabian) 1975. Verlag Schrollner & Co. Locarno.

(平成12年12月6日受理)